

酪農王国オラッチェ 地域を大切に歩む

商品は地産と安全にこだわる

酪農王国オラッチェの売店である王国ショップには多くの商品が販売されている。神尾純也さんはショップ販売での商品のこだわりについて「まず、商品は地域のものであることにこだわっています。地産地消を進めることで伊豆全体を盛り上げていくためです。また、有機製品にもこだわっています。買っていただくお客様に安心安全な商品を届けたいからです」と語る。

その言葉の示す通り店内には

地元の製品や有機製品があふれていて、中には美容製品も。そんな商品群の中で特に目を引くのが牛柄のチーズケーキだ。従業員の絵をもとに作ったパッケージに包まれていて、もちろん味は折り紙付き。見て食べて二度美味しい商品となっている。

さて、ショップに売られている商品群の中での大人気商品が丹那牛乳をふんだんに使用したラスクとサブレだ。焼き菓子との相性がバツグンな丹那牛乳の濃厚な味が生かされた商品で、



▲人気商品のサブレ（左）とラスク



牛の乳しぼりを体験する記者

丹那盆地に位置する酪農王国オラッチェ。多くの動物と美味しい食べ物に癒され、地域を大切にしたい商品開発や行事も進めている空間だ。

可愛い動物たち

オラッチェの大きな特徴の一つが数多くの可愛らしい動物たちの存在だ。牛や豚、ヤギをはじめロバやヒツジまでおり、一部動物には餌やりができるほか、ウサギと触れ合える施設「ラビット・スクエア」などもある。また、

動物で心を癒した後には美味しい食事や楽しい体験が待っている。丹那ならではの乳製品、そしてオラッチェ農場で育った新鮮野菜をふんだんに使ったオリジナル料理が楽しめるレストランはその代表。また、ティールーム花の温室内では丹那牛乳を使ったバター作り体験やアイスクリーム作

美味しい食事と楽しい体験

牛の乳しぼりも体験できるなど、動物好きの人にとってはたまらない空間となっている。動物たちの中には個性的なものもいる。白黒模様が特徴のホルスタイン種ながら黒牛のように真黒な「くろちゃん」はその筆頭だ。過去には、ハート模様の牛もいたという。

その美味しさから多くの客が購入する人気商品となっている。ほかにも、ショップにはオラッチェ内の地ビール工房で生産されたビールなども販売されている。オラッチェを訪れた際にはぜひチェックしておきたい。



▲共同開発したビール

り体験など、丹那ならではの体験が楽しめる。

工夫した商品開発

そんなオラッチェだが、商品開発も行っている。酪農王国株式会社の神尾純也さんは

「お菓子は丹那牛乳を生かして開発を行っています。濃厚な丹那牛乳は焼き菓子との相性が良いのです。また、地ビールづくりも行っています。昨年からは三島市の女性グループ「Hips（ヒップス）」との共同開発のビールを生産するなど工夫した商品開発を行っています」と話す。共同開発したビールは新聞などで取り上げられるなど、注目度の高い商品開発を進めている。

地域貢献も進める

オラッチェは地域との結びつきも重視している。売店ではオラッチェの独自製品ばかりでなく静岡県内、特に伊豆で生産された製品が多く販売されていて、地産地消の一助となっている。また、オラッチェで生産している製品の材料も地域のものにこだわっている。

また、製品以外の地域貢献として函南すいかを使った行事である

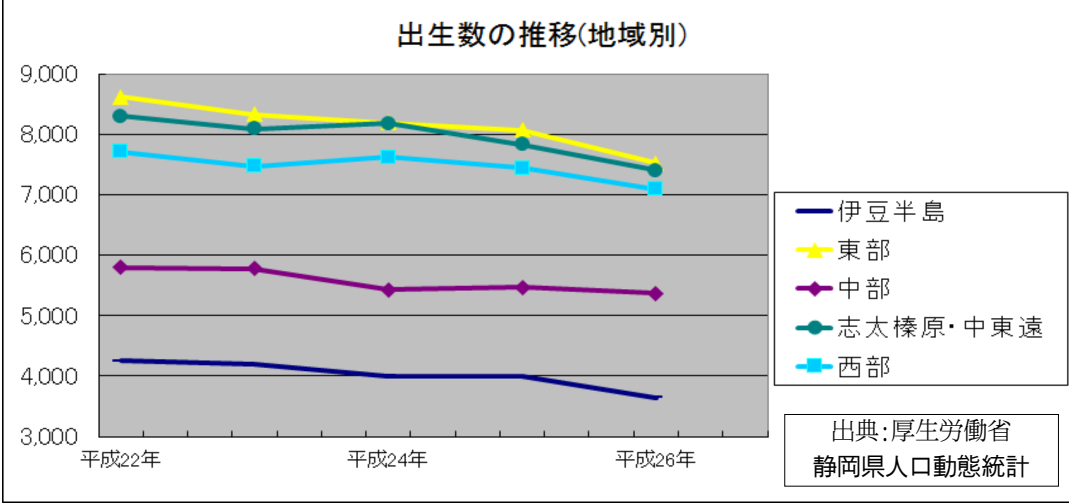


▲地域貢献を語る神尾さん（右）

「函南すいか祭り」や地域からの依頼による飼育動物を使用した移動動物園も行っている。なぜ、地域と積極的に結びつくのか。その理由を神尾さんは「オラッチェの設立の理念

まとめ

魅力あふれる地元企業 地域のためにも地元就職を



今回「まち・ひと・しごと新聞」第1号を制作して感じたのは、思っていた以上に伊豆・東部地域には魅力のあふれる地元企業が多くあるということだ。この新聞でも取り上げた「桃中軒」などはその代表格だろう。駅弁という日本独自のものを作りながら世界でも紹介されるような製品を作っている。「徳造丸」もそうだ。稲取という地域の特徴を生かしながら魅力ある製品づくりを進めている。また、「酪農王国オラッチェ」は様々な工夫を重ねながら商品開発を進めており、また、地域との結びつきを深める行事を開催している。もちろん、その三社以外にも全国的にも評価を受けるような企業が多く存在している。

しかし、それとは裏腹に

伊豆地域では少子高齢化が急速な勢いで進行している。上図からも分かるように、出生率は右肩下がりを続けている。地域には1学級となった学校も多い。その背景には若い世代の地域からの流出があることは明らかだ。その一方で伊豆地域全体での高齢率は32・8パーセントに達している。このままでは労働年齢層がいなくなっていく状況になってしまっている。地域の魅力あふれる企業も労働者不足にあえぐこととなるだろう。それは結果的に更なる伊豆地域の過疎につながる。

そのような負のスパイラルに陥らないためにはどうしたら良いのか。それは地域の若年層が地元での就職を進めることだ。若年層にはぜひ、地元企業へ就職してほしい。進学などで地域外にでる人も多いだろうがそのような人たちがもつターンの就職を考えると、きつと働きたくなる企業に出会えるはずだ。

編集後記

今回の新聞制作は取材させて頂いた企業の方々をはじめとして多くの方々の協力を受け制作することができました。また、三島信用金庫の担当者の方には多くの助力を頂きました。この場を借り改めてお礼申し上げます。

拙い部分も多々あるものの、地域の企業の魅力を発信することができた新聞になったと思います。この新聞を通して一人でも多くの人に伊豆・東部地域の魅力ある企業について知って頂けたら嬉しいです。

担当

- 神山高校写真報道部
- 伊藤 浩 (2年)
- 河津 真行 (2年)
- 内藤 大暉 (2年)
- 西山 直宏 (2年)
- 橋本 樹 (2年)
- 石井 拓也 (1年)
- 今村 菜裕 (1年)